

令和3年度後志教育講演会 兼 第54回後志管内教職員研修会

演題「渡る世間は嘘ばかり・・・Part I」

～思考停止の世の中で…どんどん増える発達障害、ストレス関連障害、認知症…3つ子の魂100までも、地域なくして国ならず～



講師：高橋義男氏(とまこまい脳神経外科 小児脳神経外科部長兼副院長)

日時：令和3年12月28日(火)

会場：倶知安町文化福祉センター大ホール

◎講演内容

<はじめに>

こんにちは。よろしくお願いします。今日は所長さんや皆さんのおかげで雪いっぱい、吹雪のホワイトアウトのすごいいい日で、やっぱり北海道人ですから、感激します。雪があると寒いでなくむしろあったかい。今苫小牧にいますけど、雪がないんですね。雪がないと冬ちゅう感じなくて暖かさ全然感じられなくて寒さだけ、苫小牧という街の冷たい性格出してます。美笛峠をちょっと越えて途中からやっぱり雪が降りだし周囲が真っ白。犬や兎じゃないけど超元気！それが空回りしないように気をつけます。既にさっき車を雪の中に突っ込んで皆様にご迷惑かけました。

本当にこういう機会をいただいてありがとうございました。今迄普通にあった心のこもったキャッチボール形式の対話がなくなった、今の狂った世の中の現実。そして、多分学校の先生も親御さんもみんな悩んでいる、今の時代の子育ての難しさを注意欠如多動性障害(ADHD)など発達障害を中心に、どうやっていくべきかということをお話できればと思います(図1)。

この倶知安町というかニセコに私の患者さんが5人ぐらいいます。昔みんな赤ちゃんか就学前の重症の子どもさんだったんですけど、彼らのほとんどが絶望の淵から這い上がって今、20代から30代なんです。交通事故による頭のケガで6ヶ月間ぐらい意識なかった、そういう子がいました。今ではニセコでじゃがいもを作っています。豪雪うどんですか。じゃがいもを中に練り込んでるうどん。そういうの自分では作ってないと思いますが、送ってくれます。本当に感無量というか、幸せ者です。本人はわかってないけど、小さい時の記憶ないから。でも、受けた真心とか、関わった人がそばにいなくとも見守られてるという感覚の中で成長、感謝と共に生き抜いて、そうすると普通の子も達と全く違います。「子どもたちは宇宙人」、すごいですね。小児脳神経

外科というのは大人の脳神経外科の治療や内科、外科などの一般的医療と違って子どもが社会に入っただけで治療が終わるという継続医療、支援する医療がある。ですから、子どもが育って大人になるまで可能な限り診つづけます。病気を治すだけでなく「育てる治療」があるのです。物理的にずーっと一緒にいるのは不可能ですけど、心はいつも一緒ですから、子ども達が大人になった姿を見ると医者冥利につきます。子どもの医者の活動範囲は子どもの教師とダブります。

<寄り添うとは…>

多分先生たちも同じなんだと思いますけど、診るということは病気の急性期が終わったからといって途中でやめて、誰かに渡すのじゃなくて気になる子どもの患者を一生見ていかなければならないんです。それがなかなか社会、現実としてやっていないっていう、やろうとしないという大きな問題があるんですね。皆さんも教育責任があるのと同じように、私たちも子ども達に治療責任があって、子ども達が社会に入って、初めて治療が終わる。単純にご飯を食べて大きくなった子どもではなく、成長して心が大きくなって大人になってちゃんと社会に入って認められ、社会のために生きていけるようになっていくのを見届ける。それで一つの治療の過程が終わる。子どもの場合は病気を治すとともにその中で成長のプロセスを大事にしているのです。ある意味たくさん子どもを持つ親なんです。多くの医者の方はそれができてないっていうのがある。小児科の場合も保健師さんとか行政も「寄り添う」ってよくいうんですけど本当のところ出来てない。「寄り添う」って言われるとなんとなく皆さんだまされちゃって「いいかな」と思うんですけど、実は寄り添ってないんですね、口だけって言っちゃって。ちゃんとしていない、嘘なんですね、嘘だらけ。だから私の場合は「寄り添う」じゃなくて「一緒にやっていくんだ」って思っています。こうやって小児脳神経外科やって 37 年になりますけど、これが一番大事なことだと思うし、私も 72 歳でこのごろよくわかってきたんですけど、寄り添っていくというよりも、喜びも悲しみも実は全部、みんな家族だという感覚で一緒にやってくんだと。それが治療だと。あとで話しますがいつも一緒にいなくていいんです。それでも気持ちは一緒にいけます。出会った時からずーっと繋がっている。

僕の恩師も去年なくなりましたが、問題児だった私にやっぱり寄り添っていくよりも「一緒に付き合ってくれた」というのが僕の人生にとっては大きかったと思います。寄り添うだけだったらこんなふうにならなかったと思う。おかげで私は「青春を謳歌」した。そして、その財産を如何に繋ぐか？それで今日来ました。



実行委員長挨拶 齊藤信之

<世の中の変化>

世の中は嘘だらけです。小児の発達障害も嘘。実は病気ではなくて、多くの場合子ども達にちゃんと寄り添ってこなかった現象として起きているんですね。それは世の中が狂った“つけ”として生じている。それがちょっとばれたらまずいからということで、国は脳が部分的に傷ついているとかどこかおかしいところがあってこの障がいが生じると同調者を募り教科書に書いたりして、薬を出すようにしていますが、実際問題は、世の中

が変わってきたことが主な原因なわけですよ。世の中の変化に人間が反応した、つまり現象です。今の時代の障がいは何らかの損傷などによるものと社会的要因による現象の二通りがある。一応ここにちょうどスライドも出ていますが、約 20 年前ぐらいから世の中が明らかに変わっちゃってですね。それまで Face to Face、Skin to Skin で先生方はやられたんだと思いますけど、今はスマホ to スマホになって、隣にいるのにスマホで話をするとか、同じ部屋にいるのに Web で会議もやるようになって、本当は顔つき合せて横でしゃべれやってみて感じなんですけど、それができないというのは、やっぱり異常な大きな問題です。便利屋スマートフォンにやられている。そのために状況判断能力やコミュニケーション能力の低下となってストレスに弱いとか人間関係のいろんな問題が起きているんですね(図 2)。

<講演について>

私自身ちょっと年とってきているので、何しゃべっているかわかんなくなってることもありますけど、大事な事を喋っているみたいだけども聞き取れなかった、そういう時はあとでもう一回聞きたかった、質問したかったと思うんで、それで諦めるのではなく次の機会をつくれれば私は思っています。ですから私の講演のやり方は他の人とちょっと違い、2 通りあります。

私の講演スタイルは、普通の講演なんかだとだいたい 1 回こっきり。ウケ狙ってそれで終わりなんですけど、その地域の社会問題というときには、大変皆さんに申し訳ないですけど、少なくとも 2 回させてもらいます。今回も長谷川先生に言いました。1 回目は問題提起とか現実がこうであるというお話しますが、2 回目は皆さんのいろんな問題点とか悩み事とか、そういうものを持ってきていただいて、一緒に討論していく、そして解決していくってことが大事だということでやっていきます。私の講演内容は勉強や癒やしではなく問題提起と挑戦になります。次回は地域展開。どうぞ宜しく。

<地域社会変化の共有>

皆さんもすごく感じていると思いますけど、今の世の中の状況、ちょっと待ったなしですね、思いやりほとんどない、かなり狂っています。毎日のように、発達障害の子どもが新患で受診しますし、不登校多いし。どうなってるのよという世の中ですから。その根本にはやっぱり子どもの変化もあるし、一番は親の変化っていうのがあるんですけど、そしてその裏に狂った社会の変化がある。それを何とかしないと、いわゆる人間の生き方っちゃうのが上手くできないんじゃないかと思います。“原点回帰”とよく言うけど、どこの原点に帰ればよいかわからない。だいぶ前に狂っているから江戸時代ぐらいまでに戻るかという感じです。



祝辞 後志教育局長 川端香代子様

時間の関係もありますので、この辺でスライドをやっていかうかなと思います。皆さんご存知のとおり、いわゆる顔と顔を、全身そして周囲を見ながらいろいろな形で相手の表情とかも見ながらコミュニケーションやっていくっていうのが、普通の人間の社会だったんですけど、今の時代すごく変わってきちゃった。今回、長谷川先生と僕は同じ意見でしたけど、今 Web 会議っていうのが普通なんですよ、皆さんご存知の通りそれでは雰囲気や全体の動きがわからない、

お互いの熱意が伝わらない。ただなんとなく情報を喋ってるだけなので大事な点が推測できず、「まっいいか、わかんない」で終わっちゃう。私達は状況や情報を声や表情だけでなく体や動作など色んなもので何が言いたいのかをつかまえている。それが持ちつ持たれつ人間、ホモサピエンスなんです。今回はその失われた特徴を取り戻し、持ちつつ展開する、そして、その結果、長谷川先生と話し合った、今コロナ状況を加味したハイブリット講演となりました。

<事件と発達障害と社会的対応>

(大阪の放火事件の写真をしながら)

はい、皆さんご存じの通り、大阪人が狂っているわけではないんですけど、世の中完全に狂ってきているね。これも多分今、拡大自殺とかなんか言ってますけど、そういうようなレベルではなくて、基本的にはこの人にも発達障害があって、今の時代、親も子も好き放題という流れの中で発生したような事件かと思います。

世の中の変化が作り出したもの、彼の問題行動にいろんなことあっても、障がいというくりでとり出し、保護的状況とかそういうの作れなかったのも、教えられる体制もできなかったのもこうなっちゃったで終わってしまう。何回も言ってるんですけど、私達は教えられて育つ動物なんです。ところが今の時代生き方を学ぶ機会がなくなって、我慢がなくて、本人の好き放題、狂っている状態になってしまった。この狂ってる状況の中でどのようにやっていくかということがこれからの私達の課題なんです。

あとで出てきますけど、共存とか共生という言葉が次々、形として出てきますけど、今の状態であれば、彼らに対してどうやって支援していくか。治せる場合だったらいいんですけど、治せない場合は、どうするかね、そこをを考えていかないと。まずは支援を試みるかもしれないけど駄目な場合どうするか。皆さんの方で「まあ仕方ないね。」という感じの支援でいくとんでもないことになってしまいますから。支援が効果を生むかどうかは本人のやる気がというか、しなければならぬと決意することが大事。そのやる気をどう出させるか。本人自体に努力してもらわないと解決は難しい。だめなら地域だけど、今の地域は何もしない、出来ない。あとで今日のおみやげの私の書いた発達障害の新聞のコピー見てください。対策書いています。それでいいの。次回実践的な実直な地域展開のお話しとしましょう。キーワードは「Have to」「ねばならない」。

<親の変化>

先生たちが親たちにいろんな形で責められてる等ちょっと前まで聞きました。モンスターペアレント。その態度は、あげあしとりと脅しだった。それは既に過去の状態、今や親自体が本当に狂ってきちゃったし、社会が狂っているからそのかかってくるレベルがまともじゃない。相手もまともじゃないのにまともな対応しているから問題が起こるし、解決しない。親が子どもを一生懸命体を張って見守るといふ、昔よく言われた母性本能は過去の言葉になっちゃったんですね。ですから皆さんが森村誠一の人間の証明という話。読んだことある人、どのくらいいるでしょう。大丈夫ですねこれだけいたら。お母さんのいつまでも子どもを守る母性本能と子どもにはどんな親でも慕う気持ちがあったんですけど、それがなくなってきているのが今の時代。要するに親が変わった、学校が変わった、地域が変わった、結果子どもが変わった、いろんなことが起きてるわけですね(図3)。

環境の変化でその人が変わったんじゃない、脳自体が変化して、人間が変わった、環境を変えた、地球温暖化だから日本自体が変化してるからそれに対してどうやっていかか考えて、もう 1 回分析してリセットさせていかないとならない、今の狂った世の中の状況に対応出来ない。NHK の噂の保護者会のレベルじゃないんですね、実際は。TV の内容、あれはタレントのお話、実経験、実臨床ではないから受けを狙った無責任なものなんです。世の中に影響のあるメディアの内容はちゃんとマトモにしてほしい、別にデマやフェイクをつかってまでも面白なくてよい。

<地域・世の中の変化、日本という国の問題>

今からだいたい 40 年ぐらい前、地域の中で助け合うみんなで子どもを育てる、集団で人間を育てていた時代、それが普通だったんですけど、それがなくなってきた。特に今回お話ししたいことは子どもだけ、親だけでなく、一番は高齢者自体も変化している。認知症、昔は痴呆老人、やる気のない高齢者こんなにたくさんいなかった。高齢者が変化、その結果、町全体に尊敬がなくなって町が劣化している。なぜ今まで生きてきて沢山の経験を持って尊敬されていた高齢者が変化したのか？それは多くの高齢者が人の欲に対応した産業の方針、金儲けに敗けた。今の高齢者はプライド、恥を捨てどうしても楽な方、何もしないで保護されるのを待っている。昔と違って、若者に敗けない、人の世話にならずに生きぬくという時代でなくなった。その辺から高齢者の生き方がなくなり、商売の対象になった。施設側は無気力、口ばかりの高齢者を待っている。

高齢者が劣化した一番の大きなポイントは約 30 年前。「アナログからデジタルへの世の中の移行」。ね、こんなもの使ってもうまくいかなんだよ。なんかそのうち終わるんじゃないかなと思ったけど、どんどんその方向になっちゃった。高齢者はどんどん置いていかれ、生き方、経験を繋ぐという大事な役割が失われ、生きてる意味がなくなった。「生き字引」でなくなった。

今の時代は経験がいなくなった、パソコンの中に経験や伝えたいことが入っている。考える必要がなくなっちゃっている。「思考停止」の世の中。みなさんは学校の先生だから大丈夫かもしれないですけど、僕らなんかどんどん漢字が書けなくなっちゃう。いざというとき字は書けないし、なんてしゃべっていいかわからない。言葉が出てこない。考えても出てこないという状態が生まれてきている。昔は考えなくても出て来たんですよ、脳がパソコン。言葉がペラペラと。脳自体がだんだん退化しているのを実際に感じている人が多い。食べ物がないという危機感がない、何もなくても食べられ、楽ちんになったからでしょう。何もなくてもご飯が食べられる。ボーっとして口を開けたら誰かが餌くれる、緊張感なし。一回楽をしたら、そこにはまったら戻れない。高齢者はただでさえ記憶力が衰えているところに考えないからほとんど絶望、それが今の時代なのです。



会場の様子

要するに結局人間っていうものの自体が、便利で楽な方、金になる利益の方に流されていく。苫小牧に来たばかりの頃 15 年前、ミートホープ事件がありました。陰で隠れて、安けりゃいいんだ、牛肉と言って色々な肉を混ぜて提供、雨水で肉を解凍、みんなの健康考えない。食品管理が出来てない。北海道も道新も NHK も知ってたけれど見ないふり。道民のことを考えてない。ですから国またこれもさっぱりしすぎちゃってますけど、

TPP やなんかで問題なことは、国民の健康が守られていないということなんだけど、それを他人のせいにして知らんふり。だからいつの間にか忘れられちゃいます、中国の餃子事件。なんかわけのわからない物が入っていて、そういうのを解決しないうちに外交問題になるからで終わっちゃったし。安い餃子を食べるのが一般国民。自分達食べないから関係ない。医療ならエイズだってそうですし、私の患者さん一人がヤコブって病気になりましたけど、まずいのは何か皆さんご存知でしょう。国の調子の悪さ、判断力のなさです。国民を守れない。厚生労働省の資質が悪い。なんでヤコブに汚染された硬膜を急いで許可して輸入してしまったか、反省しないし、国民のことを考えてないから補償もしない。決定的にまずいのは今回のコロナワクチンでわかると思いますけど、医薬品はほとんど外国任せ、他人任せっていうのは日本の欠点、弱点。薬害エイズのときもそうでした。だから、何かあったって責任追及出来ない。追及しない。「ただのもの、安いもの、外国製は要注意」

コロナ禍でどういうふう支援しようか国は今ちょっとやっていますけど、自国でコロナワクチン作るっていつまでできてない。いろんな形で援助金のばらまきそれみんなの税金、むやみにお金やっちゃって財政が大変な家庭は困ったところに使うかもしれないけど多くの家庭は子どもの支援にももらったお金はきれいに子どものゲームのお金に、結局金足りない。コロナよりもまずい状況がコロナ下で出てきた。文部科学省もまずい。教育のまちがいがあがる。金儲けのための教育ばかりやっている。生き抜く手段を教える教育でない。字を書けない子ども、時計が読めない子ども、勉強しない子ども、お手伝いしない子ども、集団に入れない子どもが今ドンドン増えている。パソコンと一緒に本当は手話をやればよかった。耳の聞こえない人の状況とか立場とか教えてね、相手が何を思っているかという推測力の強化と思いやりの強化をやればよかったんですけど、そのところをしないでパソコンでどうやったら金になるのか、どうやったら考えないで楽できるか、どうやったら大きい会社に入れるかそればかり。

<マニュアル化の弊害と発達障害>

戦後76年、女性参政75年。いろいろな形で民主主義の真似がやられてますけど、状況はむしろ悪くなる。要するに人間は集団で生きる動物、教わって育つ動物だったんですけど、それが出来なくなっているというのが現実。教師と言われている先生たち皆さんが頑張っていけないとならないんですけど、人間にとって大事なものは愛情と共に育つこと。脳に能力をもたせること。生き抜く力をつけさせること。子どもは愛情という信頼の中で育たないと知識が身につかないだけでなく、人間そのものが変化、愛着障害になる。症状としては人に寄り付かないとか、逆にベタベタしちゃうとかいろいろな形。落ち込みやすい、あきやすいとかいろいろな想定外の症状がある。問題は、国の方で愛情がうまく与えられなかった子どもをうまく支援してくれればよかったんですけど、なかなかできない、しない。要するに形にはまったマニュアル化した子育てばかりで、子ども個々に対応していないから子どもの心、つまり脳に魂が入らない。「脳はこころ」。そういう基本的なことが抜けているために大事なこと、体で教わるとかそういうことが出来ない。表面合わせるけど、最終的にはみんなバラバラっていうような形になっちゃう。ここ40数年教育を含めて大人の顔を見て育つくらいしか、子育ての内容がなかった日本の子育て。結局は子どもに好きなようにやって下さいとして、次から次とADHD、自閉症スペクトラムなど発達障害。要は国にマニュアルあるけど最も基本となる愛がない。仏作って魂入れずと同じです。

魂は心。心は脳。つまり、脳を創っていないと子育て難しいでなく子育てしていない。

<子育てと母性本能>

子育てに必要なのはやっぱり母。母の愛。いろんな支援なんかもそうですけれども、一番大事な的是見守ってくれるのは、そして自分を育ててくれたのはお母さん。結構かっこよく感動的に言いきります。が今の時代は母親からの愛情が足りない。だから、町内会、地域全体で子どもを見守りましょうというわけです。でも結局自分たちの仲間内でもできていない。そんな地域社会になっちゃった。向こう三軒両隣がなくなった。これが非常にまずいんですね。元々あったものやっぱり地域に位置づいていたものをやらなきゃならない。これは僕が57才の誕生日のとき。まだ母親が生きていたときですね。僕は中学校からずっと親とは暮らしていません。だけど、もう親っていうやつの母性の流れ、感覚が身についてあった。すり込みみたいな感じで。親がずーっと側にいるって感じていた、ずっと見守ってくれている、離れていても見守られている。お互いに通じるものがあった。側にいないと駄目だっていうわけじゃなくてまなざしを感じていた。多分学校の先生は得意なんだと思いますけど、それが出来れば、別に一生一緒じゃなくても、遠く離れていても親子の愛情、先生と生徒の愛情はつながっている。子どもは守られ安心して育つ。

<国は信用できない、国は公ならず…>

これは僕の高校時代の放課後です。昔は皆さんそうでしょうけど、長谷川先生なんかはそうだと思いますけど、僕らの時代、タバコは吸ったら駄目だけど、くわえてもいいって言われていた。だからだいたいろくでもないことを真剣にですね、ある意味、自由に考えた。子どもの頃から生き方があった。親は忙しくて子どもを構えなかった。子ども達は自分達で考えて子ども同士で遊んだ。そして遊びの中で反省と感謝と挑戦と尊敬と礼儀を学んだ。

国は国民のことは考えない。国はタバコは本当は悪いと知ってたくせに、問題は国の金もうけのプロパガンダとしてタバコはどんどん吸ってもいいよって話だったんですね。さて、それはなぜでしょう。渡辺先生なんですか？渡辺先生いますか。はい。どんどんタバコ吸いましょう。税金が入るからですね。ですけど、なんで体にいいというふうになるんでしょう。このハイライト出てきたときに生まれてない？生まれてないからわかんないね。70歳ぐらいの人いますか？これやっぱその時代の方ならわかりますけど、フィルターを付けたんですね、フィルターでヤニが全部取れちゃうから、国が全部これ取れますよ、「どんどん吸いましょう」と。これ真っ赤なウソね。ですからいろんな形でデマを流す国を信用するなっていう話なんですけどね、いろんな形でこういったタバコは電子タバコも出てますけど、基本的にはまずいでしょ。それでも国はやる。他にも、お酒がある。アルコールも適度だったらいいですよ。適度ってどれくらいだってよくわかんないですね。だから基本的には本当はまずいでしょうけど、飲んでて、ちょっと楽しいかな、プラスマイナスのかけ引きそこはやっぱり、根底にはいろんなことが隠れている。医療もそうですけど、過剰診断、過剰診療。病院受診したら病名ついて薬がたくさん出ちゃう金儲けです。今や世の中病気だらけ。50才過ぎたら病気自慢。患者は病名つけば安心するのかプラスマイナス、駆け引きですね。要するに今の時代の楽しいということはどういうことかということです。そして、

楽しければいいのかということです。ですから今言われているカジノもプラスマイナス駆け引きですけど、後で出てきますけどやっぱりカジノってなるとちょっとまずいでしょ？多くの人がゲーム障害で人間らしさを失い何もできなくなる。それなのにそれを国は率先してやろうとしている。これも国が悪いですね。賭け事とするからまずいどころか、そういうゲーム障害と呼ばれている現象が既に出て来、人間の生き方としてまずいと、もはやはっきりしているのに。金に目がくらんだ国の意志を隠している。第二次世界大戦の時もそうです。国っちゅうのはカッコいいとかどうのこうのごまかしながらメディアを使いながら国民を騙す。プロパガンダやるんですね。みんなのためだ、家族のためだと言って国民を管理する、そして、国民自体が、おかしくなるのを看過するのが、そしてそれを金にするのが国です。自殺も殺人も多い。ひどい国です。悪徳代官が仕切る国。何が平和を愛する国ですか？もう一度いう“原点回帰”どこの原点に戻るかわからなくなってしまった。そこまで来ちゃった。

<パターン化した世の中で嘘つきばかりでストレスだらけて脳が死ぬ>

今の時代は意思がパターン化された、管理された生活、文化。AI の姿が見え隠れ。簡単にパソコンなんか通して、パターン認識による解答が多くなる。クリック、キーを押したら答えが出てくる。考えない思考停止。ロボット化。思考停止したときに、思考を誰かに依存してるから楽なんですけど、その時何が起きるかといったら、



講師紹介 副実行委員長 渡邊 均

皆さんわかると思いますけど、脳が機能しない。脳はもう退化してますよね。考えないし、ですからその推察力もなくなるし、当然のここのように記憶力、状況判断能力もなくなりますから、ストレスに対する抵抗も出来なくなる。AI に支配される。次回にまわしておきますけど、そういう中でやっぱりストレス関連障害っていうのがドンドン出てきている。皆さんストレス多いのは知ってると思うけど多

分そのストレスが体にダメージを与えること考えていないと思うんですけど、下手したら死んじゃう。地域の中にもめちゃくちゃあるんですよ今。

都市だけでなく、地域にも沢山ある。気がつかないだけとかわからないだけでストレス関連障害たくさんいるの。防ごう地域都会化と言っているんですけど、地域自体が都会化しちゃって、地域がバラバラになっていますから。助け合いがほとんどなくてストレスだらけ。地域も情報社会の中で嘘にかき回され混乱。経験と考えるということ、創造力、思いやりがどんどんなくなってきている。学校でも、店でも、家でも電子機器を通しての経験、バーチャルリアリティーになっちゃいますから、何が本当かわからなくなっている。嘘つきの名人沢山ですぐだまされる。嘘を流してすぐ消去。デマとフェイクニュースが普通になって人間にとって、ホモサピエンスにとって一番大事なお互い様信頼を失わせた。互認互助を奪った。これから AI の社会になって、自分の脳で考えることがなくなって、AI まかせが更に多くなって人間はどうなる。すべての行動が化学反応とかに分析されて人間の大事なものが何かわからない。生きるという意味が分からなくなる。

<病名と現象>

時代とともに、障害も増えました。今の障害は二通りある。もともと脳や神経に傷がついたり、神経の形成ができずに障害になった場合と社会状況の変化に伴った障害がある。発達障害と認知症と高次脳機能障害、

病名になってますけど、病名ではないんですね。現象。だからこういう世の中になったら変わった行動が出てくる。だから現象です。現象は誰が作ったかという人間が作ったんですね。だから治せる、その点から対処していかないと、ね。いろいろなストレス関連障害、適応障害。適応障害はもう有名ですね。皇室の人々が美智子様、雅子様はじめだいたいみんななる奴。あれですよ。大阪なおみもそうだし、みんな誰でも、似たような経験が少しはある。ストレス障害、適応障害を病気みたいにしてやっているけど、ストレスに反応する現象だ。3歳ぐらいになると脳が80%ぐらい出来てくる。状況を判断するようになったらこの現象が起きてくる。おなか痛とか。3歳過ぎたら思うようにならなかつたら嘘をつく。嘘というよりストレスに対する現象だったんです。昔はストレス反応を仮病って言ってたんですけど、それがすごく増えて反応が過ぎて病気になっていますね、ストレス関連障害。



会場の様子

そして、今の時代体質も変わって熱中症、反射神経なし。昔は熱中症はあまりなくて、名前も日射病って言われていた。だから炎天下でしかなかった。今やそれが冬でも起こる。昔は反射神経もあったんですよだから物投げられたりしたらすぐよけた。今の時代は先生たちがチョーク投げたら生徒に当たっちゃうんですね。投げるのを見てそのままだからよけれないので注意して下さい。生まれてからだいたい3才ぐらいの間に、その状況、状況で汗腺という汗を創るやつができるんですけど、今の時代は、生まれてからすぐに快適な保育環境ですね、そしたらなかなか汗腺ができない。そうすると、しばらくたって普通の生活に入って、外に出たり、部屋の中においていくら暑くなくても体の中に汗腺が少ないから汗が沢山できない。そして熱中症になる。だから生まれた時からの色々な生育環境が快適なことに問題がある。体が訓練されない。これを言っちゃうことはタブーになってしまっている。年寄りも当然、いろんな環境の中で老化だけでなく年寄り自体の体が変わっています。しつこく何回も言いますが、脳の状況も変わったけど、体も変わってきている。体質の変化、それを国は隠してる。だからそういう面があるから、国は病気だっという形に変えて国民だましている。渡る世間は嘘だらけ。だからそこを気をつけていかないとならない(図4)。

<昨今の事件と障害>

電車の中で一人で死ねばいいものを、みんな巻き込み、この病名を拡大自殺。そういう病気だったのというレベルの話でないんです。精神科は病名付ける。私達はその病名の裏にある現実を知って対応しなくちゃならない。病気だから諦めるのではなく、人が起こした現象だから分析して、反省して対処する。本来、対応すべき国は被害者、周囲を思って行動することはまずない。国自身が本当に反省して直さないと世の中よくなりません。国が作った問題だから。それを許す国民だからどうしようもない。国は知らないふりをする。前にもありました。マラソンの選手、どうであれ万引きしちゃいけない。したくても。だけどそこところを出来なかつたらね、それやっちゃったら、病名ついちゃう。病気だから仕方ないとする。クレプトマニアを初め対人障害、睡眠障害、ストレス関連障害など世の中というか国は現象を病気にして、ごまかしちゃう(図5)。

<育てる責任>

私達子どもを診る医者にとっては治療責任がありますけど、学校の先生は教育責任もあるし、今の時代も子どもへの養育責任は親を含めてやっぱりある。高校生くらいまでは様子を見ていく責任がある。寄り添うっていうよりも一緒にやっていくっていうのが大切になる。行動を共にしていく。家族の意味を知る。それが大事なので、今の時代は診察をしながら親と子を育てていかなければならない。まず、親のこと、評価してね。一緒にやろう、親が駄目なんだったら放置は子どもの発達に影響があるから、やはり親を外して地域で見えていく、学校の先生や養護の先生とともに、そのようにしていくしかないんじゃないかと。親を鍛えられるか、だめなら諦め長期間の保護で児童自立支援施設か児童養護施設か、その判断大事。こんな世の中で人間らしさを保つためどうすべきか私達は試されている(図6)。これからこの課題の機会は増えてくる。

<障害と外見の意味と社会適応能力の必要性>

昔は、頭蓋骨の中がどうなっているかわからないから、外見良ければ表に見える状態から能力を判断した。だから、脳が半分なくとも管理職になった人もいる。ところが今はCTやMRIで脳の中身を見て調べちゃって、画像を見てそれで脳に少しでも傷付いていたら何も出来ないって思い込んじゃう。この子は能力がない、できない。周囲だけでなく本人も一緒になってできないと思うから。昔は検査出来ないから障がいのある人は少なかった。50数年前、昔の人は自分の頭調べられなかったから決めつけられなくて、ひどい麻痺があっても、怠けるな、頑張りと言われて「生き抜く力」を身に付けた。この人は元々、靴屋さんね。靴屋さんで、一生懸命頑張っていた。ある時、交通事故でその後計算できなくなってしまった。高次脳機能障害。だけど愛する奥さんのために商売変えて、トウキビ売りになってたくさんの工夫をして、大成功。要するに新たな状況の中で社会適応能力をつけていく。ね、理科が数学ができなくても大事なことは社会適応能力。生き抜く力。

<医学の発展の裏側での障害とは>

昔はみんな貧乏で着るもの初めとして生活にほぼ差はなし。何かあるとしたら学力という内面的な問題だった。そして本人も思い込む。50数年前は頭に水のたまる病気水頭症は懐中電灯で判断された。だから水頭症は極めて稀。ところが40数年前、CTが、30数年前MRIって画像診断が出来るようになって簡単に脳の状況や脳室拡大がわかるようになって症状ないのに脳室が大きかったらみんな水頭症になっていった。わかったのはいいんですけど、症状ないのに水頭症と思い込んで、あきらめてしまうわけで恐ろしい。この見か



謝辞 実行委員 庵 健司

けで判断されて、できないと言われ、本人が理解してしまう、そしてやる気なし(図7)。今の時代も昔も見かけて判断される。

<出来ないは可能性を秘めている>

今でも僕は聞くんです、学校やなんかで、子ども達は点数見て言います。「どうせできないから。」というわけです。テストはゲームと同じだ。攻略法を勉強してよい点数をとる。点数で判断するな。点数とれなくてもいいんだ。その解答を得られるまでどう考えるか。その思考過程が大事。その流

れ、ゲームプランが大事。それが勉強することの大きな意味。点数という結果ではなく考える過程、大事なのは反省と考える展開する可能性。問題は子どもが努力しないこと。反省しないで繰り返しても能力をつけるのは難しい。今の時代、子ども達はじっとして、動かずしゃべらずの何もしない子どもと我慢しない、好き放題の、落ち着かない子どもの二極化になっている。次から次としゃべっているけど何言ってるかわけわかんない子と全然しゃべらない子に分かれている。どっちのタイプにしる、頭の中は考えない、思考停止状態、だからその結果、態度としては努力しないになっている。答えをくれるのを待っている。メディアやネット、テレビに乗っちゃってる時代になっている。ですから今の時代は子どもも大人も、反省ないし、努力しないし、自分勝手に皆さんは困ってしまう。

そんな中でいじめや虐待、どうしよう。やっぱりずっと子どもと長い間、寄り添うではなくて、一緒に生きていくという状況になっていないことが問題で世の中自体がおかしくなって、それに伴って脳が変化し、人間が変わってきた。だからそれを戻していかないとならない。現実的にどうしていくか、親や家族を含めた支援と指導というのが大事なんです。ずーっと続けることが必要だけど初めに話したように一緒にいるのがポイント。だけど自分



来賓の皆様

の経験からはいつも一緒にいなくて大丈夫。大事なのは「いつも一緒にいる・・・」「見守っている・・・」という思い。私の母は亡くなくても今でも一緒にいる。私達は出会ったその時から家族になってみんなで考える、鍛える、多様性が可能性。この思考、行動プロセスを大事にしたい。むしろ親がいない方が子どもは成長することもある。愛情があればよい、私の場合はそうだった。

<20歳からの学び方と治療の仕方と現状>

一番大事なことは自分で考えるということ、それを小さいときからやること。だいたい3歳くらいまでに親たちがそういう状況を作ってやっていかないとだめ。伸びるのは20歳まで。皆さんご存知だと思いますけど、20歳以降と20歳前。教育の仕方が違うんですね。20歳それまでは見せたらだいたい見ただけ、聞いただけ、触っただけで覚える力がある。20歳を過ぎると、脳細胞は1日10万個死滅する。だからいろいろな神経細胞をシナプスで連携しながら脳に覚えさせる、シナプスを伸ばすようにする。シナプスの連携を伸ばすっていう形で基本的には能力を増やすをやらなければならない。20歳を過ぎたら脳だけで覚えるのは難しい、やってみて体で覚える。音読する。「いやな事するそれ努力」。

僕たちの時代の治療の方針もそうなのかもしれない。20数年前までは助ければよかったんですね。命を助ければそのあとは本人が生き抜くために能動的に努力していくから治したといえた。ところが今の時代は世の中全体が受動型でやってくれるのを待っている。子どもの努力が少ないから生き方教えて、能力を伸ばして、最終的には社会に入っていけるようにしなければ医療はその子どもを助けたことにならない。命を救っただけなら治療したことにならない。今の時代はしてもらおうのを待っている。20数年前ぐらいから日本列島改造論じゃないけど、世の中、危機感なくなり、人まかせて人作りがなくなり、金づくりになっていったことなんだ。そして人間の生き方の根底までも変化、福祉が商売。そして、医療も商売のやり方もちがってきた。地域も思い

やり、持ちつ持たれつがなくなって、人間の原点がなくなり壊れてく。取り戻そう能動的展開。

<高齢者が頼られない世の中に・・・>

そして、高齢者も狂ってきた。今の時代高齢者自体が全然頼られていない。僕たちの時代は「生き字引」と言われていた。要するに経験が学問だった。ところが今は経験が情報になってしまった。ネット情報も 50%ぐらいいは嘘がある。だから、今の人間騙されやすい。オレオレ詐欺初めとして嘘とデマ、フェイクが蔓延。トランプだけじゃない。一番騙されやすいのは若い人。そこところを気を付けなければならない。若い人達はいいと思うかもしれないけど、実際は思考停止状態になっているんで、経験なくて思い込まされているからいろんな問題が出てきちゃう。今の時代の狂いを直すのは挫折の中生き抜いた高齢者。「しっかり生きる生き字引」って書いてありますけど、なかなかうまくいかない時代。うまくつないでいくっていうのは高齢者の大事な役割。だけど高齢者自体がだんだんだんだん変化してきているんで、なかなか難しい。それが自分たちの最後の仕事だと考えてガンバロー。頑張ってもらいたい。一生懸命努力をし、自分たちの生きざまを見せるということが大事。高齢者の特徴は、今日できたことが、明日できない。今日できなかったことが明日できるのは子ども達。老化と劣化とは異なるんですね。老化しても劣化しないんですけど、今の時代は高齢者になって老化だけでなく劣化しちゃってる、頭も体も使わないから。運動能力、認知能力、知性知力は落ちる。精一杯生きるがなくなって朝からめまい、イライラ、頭痛くなったり、腰痛くなったりですね。だいたい頸椎と腰椎変形しますから、皆さん知ってると思いますけど、それで背短くなりますね。背短くなるのは、いくつからでしょう。20歳からですね。20歳から変化が始まっていく。要するに年齢とともに記憶力低下、海馬の萎縮が始まってくる。そうすると、なかなか短期記憶っていうのができない。それにいろいろなものがなくなっていくが、大事なことは残っているものはあるのでそれを鍛えること。シナプスを鍛える、高齢者の皆さん昔のように体を張って頑張ってください。老化は自然で病気ではありません。ですから、お年寄りそれが自然だと気が付いて、時間がかかっても一生肉体労働、体を使って憶える、頭も体も共に疲れる人生が大事です。そしたら、脳は元気になる。脳が元気になれば心はいつまでも若い。

<寄り添って一緒に付き合っていく>

何度も言いますが、寄り添うだけでなく、一緒に付き合っていくことが、先生たちも同じだと思いますけど、大事なことです。要するにその時だけじゃなくて、将来にわたって、ずっとつながっていかなければならないのです。そして、彼らが社会に貢献して初めて私達の役割が終わる。継続的につなぐということが大事です。で、子ども



花束贈呈 事務局長 長谷川 誠

達を社会の中に参加させ、人生を謳歌させる。

今から 20 年前65歳以上の15%くらいが認知症で子どもたちも軽度発達障害が10%くらいだったんですけど、今は5歳の健診で半分くらいが要支援児として引っかかる。65歳以上も70%くらいが認知症かその疑いだ。だから、今の時代、障害だらけ。40年前に1~20%くらいだった障害が今は色々な形の障害で60%くらい。何か支援を必要としたらその人は障がいになる。

その中で、親の劣化、子どもの劣化、家族の劣化によることが原因で増加している軽度発達障害がある。自閉症と言われても地域の中でやっていけば中学生くらいになれば判断ができるようになって、コミュニケーション能力もついてくる。ですから、「自閉症だった私へ」という本がでてくるね。これは本当の自閉症。一方、今は、勉強しない何にもしない子どもが沢山いるから、彼らは成人になっても字も読めない、時計も見れない、状況判断能力ない、コミュニケーション能力ない、怒ってイライラ、好き放題、これは今の時代の作られた自閉症スペクトラム、広汎性発達障害。今のままなら、ドンドン増えます。ヒタヒタと皆さんが危惧しているとんでもない時代がやってくる。どうしたらいいでしょう。次回一緒に話しましょう。看過ではなく分析して闘うことが大事です。

<親の変化と地域の虐待の実例>

今日のポイントは、今時の狂った世の中で少なくとも「親をなんとかしていかなければならない」ということ。それでないと子どもは育たない。このスライドはこの家はお父さんの身体的虐待とお母さんの育児放棄があった。親がダメな時、現実的にどうやって地域でやっていくのかという話です。ここの兄ちゃんは虐待されて硬膜下血腫になり、私の方でフォローしていた。途中で火事があって、5人兄弟のうち3人なくなっちゃって。要するに家に任せても無理、しゃあないからと施設に入れて地域の中で子どもを育てるになった。子どもをどうするか？苦小牧の行政は考えない。施設に入れちゃだめなんです。個人情報とかゴチャゴチャいってたけどそんなの無視して定期的に外来通院させ愛着障害もとれてきた。地域で育てるとは小さい時から地域の中で継続的に見守ること、そして子どもとの間に信頼を創ることで、それが少しでも子どもの心を回復させる。虐待によって受けた心の傷は一生治らない。

苦小牧の虐待は身体的虐待もあるが、ネグレクトが多い。次の子の場合は体重減少。身体的虐待はしつけからいじめみたいになってきていた。子どもよりも母親をどうするか。周囲は看過ばかりで、育てない、互認互助なし、人間じゃなくなってしまった。子どもはやせるし、知的、運動遅れていろいろ問題になってくる。母親の支援が大事だができなかつたときには地域の支援でやっていく。地域で家族を支援した。子どもは長期保護され安定したが一度生じたストレス障害はなかなか治らない。今から40年前私がこの患児を初めとして地域で育てた子どもは少なくない。ところが10数年前より地域で育てるというマニュアルが出来たが、逆に現実には口だけのシステムでほとんど子育てができていない。個人情報を理由に秘密だらけ。地域が変わってきている。地域にはいじめも多い。いじめは人間以外ではチンパンジーぐらいしか見られない。防ごう地域都会化。

<終わりに>

昔は持ちつ持たれつというのがあったが、今はそうじゃなくて、世の中自体が狂っちゃって好き放題になって子どもが育たない。何度も言いますが、大事なことは学校の先生も見守っていくのでなくて、一緒にやっていくしかない。マニュアル任せ、他人任せというところにいろんな問題が生じている。子どもたちの個々の状況を見直してそれに合わせて愛情深くやるということを地域での共通認識に持つこと。モニタリングが大事で子どもが大きくなって小学校を卒業しても、ずっとその先も見えていくことが重要。いつも一緒にいなくてもよい。見

守ることを忘れない。子どもが帰る場所があれば。そしたら信頼できる人を見分ける子どもができてくる。ですから僕らとしては大人になる高校に入る前ぐらいまでは子どもを診ていく、学校の先生は高校過ぎても、社会貢献できるくらいまで見ていく。そして子ども達が高校生になって、一人ではなかなかできないけども、集団でやったら結果は違うんだっていうことも覚えて、周囲のみんなで作っていく。そしたら不可能が可能に…。今の世の中、子どもを思う私達次第、仕方で彼らの未来が決まる。私たちが頑張っていくしかないんだなと思います。また夏にお話しできる機会があることを楽しみにしております。その時は更に“熱い魂”をぶつけ合いましょう(図8)。

まずは1回目ありがとうございました。



とまこまい脳神経外科
小児脳神経外科部長兼副院長
高橋 義男 講師

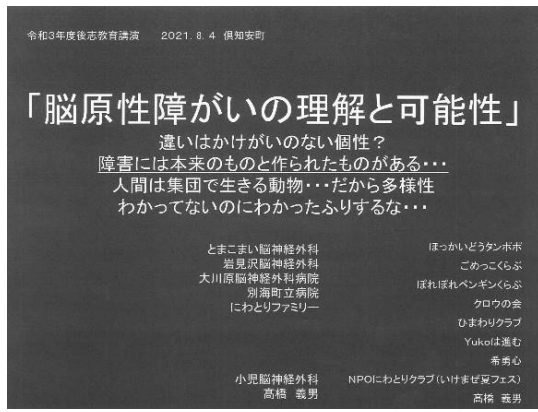


図 1

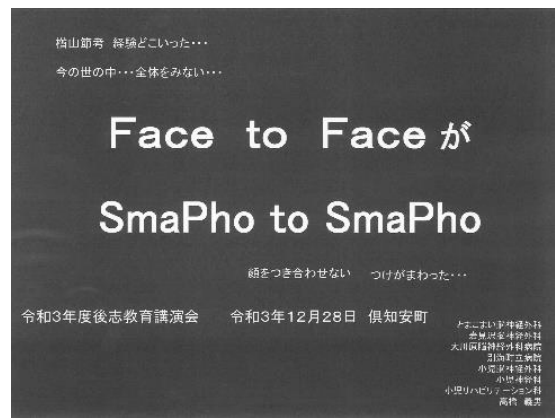


図 2

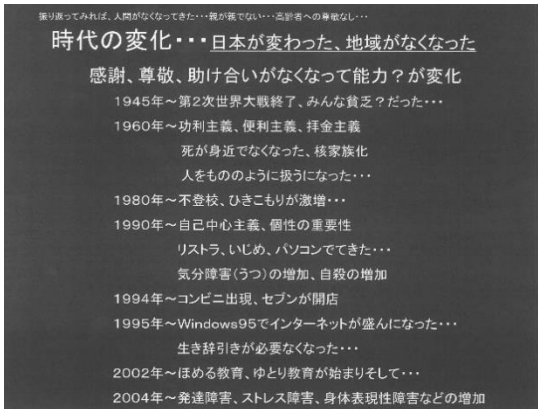


図 3

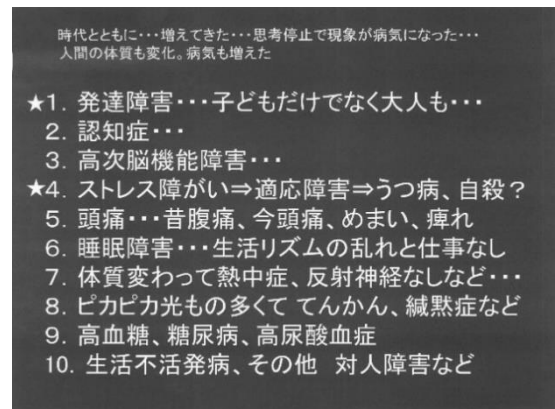


図 4

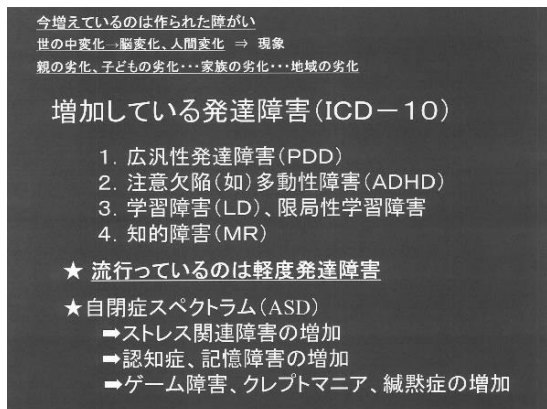


図 5

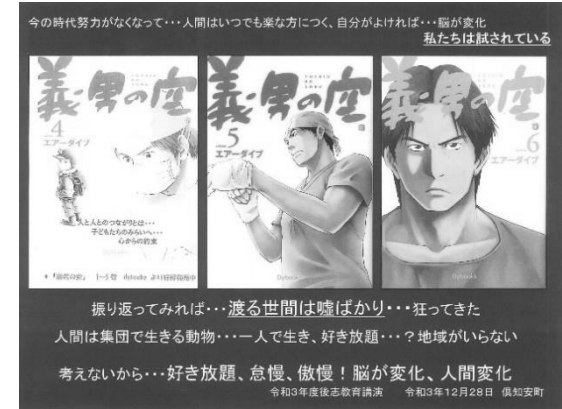


図 6

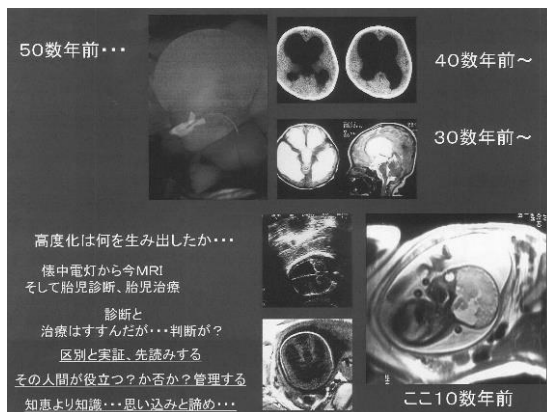


図 7

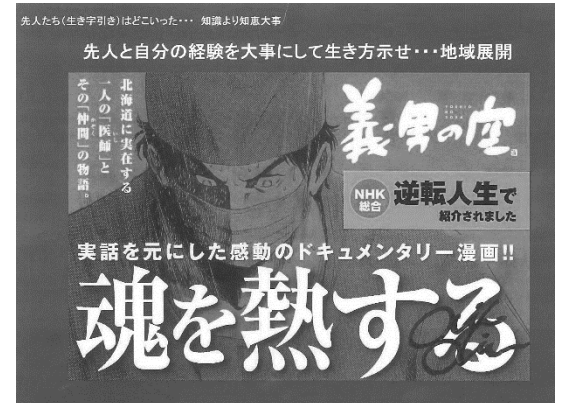


図 8